

■しまゆむた

奄美の民俗文化研究の課題覚書 本田 碩孝 (徳之島郷土研究会会長)

I はじめに

奄美諸島（以下全体をさす場合奄美とする）に関する研究の成果は諸分野にわたり多くの蓄積がある。平成6年発行文献目録だけでも300頁近くもあり「目録を数えてみますと、約6千項目、まことに奄美は資料の山、宝庫の感がします」（注1）。民話（注2）に関しても民話集、研究書を数えると30冊ほど発刊されているほどである。1郡でこれだけあれば素晴らしいものであり、民話を中心にした民俗文化に関心を持つ者にとって喜ばしいことである。有馬英子著『かごしま・民話の世界』（春苑堂出版2003年）でも奄美での採録体験から紹介している。

名瀬市にある鹿児島県立図書館奄美分館には奄美関係資料目録が発刊され数万点あると聞いたこともあるが、鹿児島県立図書館本館や鹿児島大学図書館には奄美という地域の研究資料が十分に備えられているとは思われない。収集には困難な状況があると思うが奄美は日本民俗文化研究で大きな位置を占める琉球文化圏に入り、特別な地域である以上（「沖縄で奄美を考える会」の存在など）、資料の収集にも努力を期待したいものである（注3）。因みに鹿児島大学図書館本館で奄美の項目が約120、徳之島に限定してみると30ほどのようである。また、民俗文化さらに民話という分野に関する資料はもっと少ない感じを持つのは筆者だけではないだろう。何十万点もある資料でもある地域に限定すると乏しさを感じる状況にあるのは否めない。いつでも資料を見る機会を得ることは離島の多い鹿児島県では地理的、時間的、金銭的な制約を受けているのが現状である。

筆者は先学諸氏の業績に学びながら奄美を中心とした民話の採録を試みており、多くの方々から御教示をいただいている者である。奄美での分布、変容、分類上孤立伝承話の記録の可能性、生活史との関係、資料の整備等々から必要だと考えるからである。鹿児島県下では奄美は民話集も多く発刊されおり、伝承も豊であると思うが、奄美に限定してみると資料の収集、整備はまだ必要であるという立場である。民俗文化資料の一部は関係者の御指導、御協力を得て公刊する機会にめぐまれている（注4）。学ばせていただいている者として奄美の民俗文化研究について課題になること、疑問に思うこと等がある。フィールドの重点にしている徳之島が中心になると思うが、若干の提示をさせていただきたい。

注

- 1) 奄美文庫3『奄美関係資料目録』 入佐一俊著 奄美財団 1994年
- 2) 民話についての考え方はいろいろ提示されているが、神話、伝説、昔話、世間話など民間説話の総称とする。民話集・研究書名など一部省略。
- 3) 『日本民俗学概論』 福田アジオ 宮田登編 吉川弘文館 昭和58年
『ヤマト・琉球民俗の比較研究』 下野敏見著 法政大学出版局 1989
『ヤマト文化と琉球文化』 下野敏見著 PHP 研究所 1986
- 4) 奄美民話集1～6（一部本名後記）他 阿久根市「尾崎の民話」、民俗誌等々
「徳之島の民俗文化研究課題覚書」として『民俗文化研究』 現在第7号同研究所、
『徳之島郷土研究会報』 現在第27号、『鹿

『鹿島民俗』誌現在第130号、『鹿島民具』
現在第18号（題名は省略）

Ⅱ 奄美における「民俗」とは

民話の採録をしていて「民俗文化」とは何だろうと思うことがある。

奄美で個人の民話集は5冊発刊されているが、その中3冊は筆者の編著による（後出）。その過程で民話も当然民俗文化に入ると思うが、筆者にとって「民俗とは、人が自然に向かい合い、技術を駆使し、ことばを練り上げて思想へと高めていく『生きていく方法』」であるからである（注1）。

学びの中で出会い、納得したのが次のとらえ方である。「『民俗』とは客観的存在ではないのだ。昔はそれはどこにもなかったし、どこにでもあったものである。つまり、民俗学者が民俗的考察の対象として選びだしたものが『民俗』なのであった」（注2）。具体的例で示すと筆者の出身地徳之島の井之川（第46代横綱朝潮太郎出身地）は民俗文化のフィールドとしても徳之島では注目され、若干の記録が残されている集落だと思うが（注3）、徳之島の民話集既刊5冊（注4）に関しては語り手・民話がほとんど記録されていなかったのである。筆者は自分の伝承体験と採録者としての視点から井之川のインテンシブな調査を目指し、少しずつ採録を重ねている。民俗文化に関して個人の語りを3冊出版する機会に恵まれたほど豊かに伝承されていた（注5）。まさに小松和彦氏の述べるとおりで採録者が記録する機会に恵まれなかったのであると思った。

注

- 1) 現代民俗学の視点3 第3巻『民俗の思想』宮田登編、朝倉書店、1998年
『国立歴史民俗博物館研究報告』第132集 民俗学における現代文化研究所収「〈生きる方法〉の民俗学へ」島村恭則著 国立歴史民俗博物館 2006年

- 2) 『神なき時代の民俗学』小松和彦著 せりか書房 2002年
- 3) 民謡に関して小川学夫著『奄美民謡誌』『歌謡の民俗—奄美の歌掛け—』等々の資料や酒井正子著『奄美歌掛けのディアローグ』他論文等々での資料。明治大学、法政大学の調査実習報告書等々。県教委奄美地区民俗文化財緊急調査報告書1（徳重重成分担執筆）等々（略記）
- 4) 『徳之島の昔話』田畑英勝 丸井工文社 1972 367頁
『徳之島の昔話』前田長英 著作社 1994（平成5年）338頁
南島叢書3 奄美諸島『徳之島の昔話』福田晃 岩瀬博 松山光秀 徳富重成 同朋社 2004（昭59年）450頁
『徳之島民話集』水野修 西日本新聞社 1976 368頁（下記は本書再録が多い）
『徳之島むんがたり集』① 水野修編 潮風出版 2002年（再話集）
『徳之島伝説めぐり』付録母間騒動始末記 徳之島2大祭り むんがたり第②集 水野修 潮風出版 156頁（再話集）
- 5) 奄美民話集3『池水ツル姫昔話集』拙編 郷土文化研究会 1988 332頁
奄美民話集5『保マツ姫昔話集』本田碩孝 郷土文化研究会 1992年 219頁
奄美民話集6『本田メト姫の昔語り』本田碩孝 郷土文化研究会 1998年 368頁

Ⅲ 「奄美の民俗文化」研究の課題

1 民俗語彙から

「徳之島は不思議な島である」（『徳之島の民謡』久保けんお著 NHK 鹿児島放送局 1966年）という琉球旋法の境界からみた指摘に納得しての学びの旅である。その不思議に思う語彙をいくつか紹介したい。

(1) アムトゥガミ

「アムトゥという場所に宿るカミ」であると沖縄研究の視点から渡邊欣雄氏の指摘があ

る。筆者もそう思うが、火の玉がAアムトゥからBアムトゥに通う。カミの通り道は今でも塞いでいない等々の伝承や昭和18年の大火の前にアムトゥの木が枯れたとか（井上カナ姫の体験）、火事当日に風向を変えるように祈願したら変わったなどの（何人もの）伝承に出会うと不思議感がつる。250戸ほどの全家庭にはまつられずアムトゥ12カ所（ジガミ100カ所）ほどフージュウガン（大きな集落中祈願・直試訳）の時に集落代表（区長）がアムトゥを祀っている家に米とサケイ（焼酎）を配達して頼む。12カ所にはアムトゥと通称しない他の信仰対象が祀られている場所（テラ・イビガナシ）もある（注1）。

伊仙町上面縄では、ある一族の信仰対象のようであり、詳しく報告されているが（注2）、井之川では集落の祈願などの信仰対象になっている。集落神→分散し一族神→現在の集落神への変化の可能性もあるが、課題である。

松山光秀氏は『徳之島の民俗1シマのこころ』（未来社2004年）では徳和瀬では垣根を「屋敷の東南の角・・・ところには少しアムトゥ（植木）を残したほうがよい(212頁)」と述べている。井之川のアムトゥと関係がありそうである。垣根のような囲いなどのことをアムチと言う言葉が徳之島の数集落で聞けるが、アムトゥとの関係はどうか。外に山下欣一氏の若干の報告があるが徳之島や他の島々での調査が十分なされていないように思う（注3）。

注

- 1) 松原武実「井之川のアムトとジガミ」『南日本文化』第34号2002年
増田勝機氏、徳富重成氏の報告もある
- 2) 徳吉ゆい「上面縄の信仰」『シマ』第3号琉球大学民俗学実習調査報告書00年
- 3) 崎田光演「アムトゥとアムトゥ神」(『奄美沖縄民間文芸学』第6号同学会2006年)には文献と採録から沖縄県も含む奄美の様

子が分かる。

(2)イビガナシ

イビガナシは、井之川でウキボジガナシという漂流神との複合が考えられる。徳之島では現時点で4集落にしか分布していない。

大島本島での記録に、

しまぬいべがなし しままもてたぼれ
なぬかななゆる いわておせろ

(共通語訳)

郷土の守護神よ 郷土を守り給われ

七日七夜を 齋って上げましょう

注書きによると、「いべ」は齋（いみべ）の訛りで鎮守の森のようなもの。「いべがなし」でその主神の意。「おせろ」は奉る、差し上げるの意。（注1）

とある。「いみべ」は「いんべ」とあり、齋部であり、「鎮守の森のようなもの」という意味は『広辞苑』では見つけきれない。

奄美大島龍郷の八月踊り歌などで島建ガナシ（尊称）などの伝承(1980年村田権熊氏御教示)がある。

井之川でイビガナシとして祭っているのは、ウキボジガナシが乗って来たと言う民話のある直径80cmほどの赤味がかかった石である。ウキボジガナシは洞穴に入り、そのままなくなったという伝承が残る。徳之島の伝承を訪ねると「イビ」になるとは、使いにやって帰りが期待される時刻になっても帰らない状態をさす（現在では「鉄砲弾なてい・なった」が使われる）ことや同じ状態を「ギキキチケイ＝ギキキというヒバリに似た小鳥の使い」とも徳之島のいくつかの集落で伝承される。天に使いにやったのに帰ってこない。今でも上ったり、下ったりしていると言う。『古事記』の「きぎすの使い」の古形ではないかと思うほどである。

奄美での他の島々ではどうなのだろうかと思う。山下欣一氏は「聖地」（注2）で「イビガナシとアモトガナシ」を取り上げている。

瀬戸内町須子茂の「ミヤ」に立つイベガナシは八月十五夜、旧暦九月九日に相撲が行なわれるときは「縄を張りめぐらし、さわらないようにしておく。」さわると怪我をされるとされる。また「ネリヤから来臨された神が滞在される」と言う。「鎮守の森のようなもの」とは違う印象である。

瀬戸内町油井では「ミヤ」のガジマルの下に4個の石がある。「聖地としての信仰は薄れている」と山下氏は述べるが「鎮守の森」的であるように思う。後の事例は徳之島の徳和瀬や井之川について記している。

「鎮守の森」的であれば、ノロ信仰などによって呼称が変わったかもしれないが、筆者は徳之島のアムトゥガナシは同族的信仰対象から集落的信仰対象に変わってきたのではないかと思っている。聖地は他の島々、シマジマにもあるはずであり、アムトゥという民俗語彙の記録などはどうなのか課題である。

注

- 1) 『南島歌謡大成』V 奄美篇 田畑英勝・亀井勝信・外間守善 角川書店 1979年 325頁 大島 「あらしやげ」元歌
- 2) 『沖縄・奄美の民間信仰』湧上元雄と共著 明玄書房 1974年 74頁～

(3)その他

- ①クドゥキ（口説）が徳之島では15曲ほど記録されている。
- ②ナガレ歌が大島で70曲ほど記録。
- ③ハブの民話（報恩、徳之島シュンカネイ節由来）（注1）徳之島で記録。
- ④クロウサギの民話を知らない。
- ⑤県島であるルリカケスの民話を1話しか知らない「ルリカケスの恩返し」（注2）
- ⑥為朝伝説では子供が瀬戸内町の実久三次郎だけしか知られていない不思議。
- ⑦線刻画があるのは徳之島だけ（5ヶ所ほど）。
- ⑧牛の民話が「牛喰れ按司」など徳之島にあるが、「もの言う牛」は徳之島にない。

すでに研究報告もあるが、思いつくままを記して現在の課題としたい（詳しくは省略）。

注

- 1) 治井秋喜『徳之島郷土研究会報』24
- 2) 『奄美の生活とむかし話』長田須磨著 小峰書店 1984年所収。伝承者名無し

3 むかし語り

奄美諸島ばかりでなく鹿児島県下の昔話を集成したのは稲田浩二、小澤俊夫責任編集『日本昔話通観』25(1980年版)である。それ以後も昔話の採録は続いており、成果も発刊されている。

伝説については『日本伝説大系』（みずうみ書房、後記）で本土と奄美は別々に集成されている。奄美は『南島篇』に沖縄県の分とともに分類されている。

昔話は、『日本昔話通観』25鹿児島分類法である「むかし語り」「笑い話」「動物昔話」だけでも議論があるだろうし、それぞれの項目、一つひとつの話型でも研究の蓄積があるのもあり、地方における者には全業績をなかなか閲覧できない状況である。ここでは奄美での採録状況を管見の範囲で述べるものであり、この通観の分類に従いたい。

むかし語りは、目次番号1～308迄あり、その中孤立伝承話は244～308迄65話である。65話中41話(63%)が奄美での採録である。これだけでも奄美の伝承の豊かさがうかがえる。話型を市町村別（採録時の呼称を使う）に瞥見したい。

与論町「女中と火霊」「力持ちと幽霊」
 知名町「馬の卵」「夫婦玉」「継子の汐汲み」
 和泊町「馬の皮占い」「歳の夜の御器」「桃太郎」
 伊仙町「兄と弟」「夫無情」
 徳之島町「犬の眉毛」「うなり神の由来」
 「コーイどんと鬼娘」「飛び船」「鳴る瓶」
 「日招き女」

瀬戸内町「月の子」

宇検村「女は豚」「金持ちの鼠と貧乏人の鼠」
「蛙報恩」「ケンムン婿入り」「小指太郎と
鬼」「鶏の呪言」「貧乏神」「本妻と妾」

大和村「鬼の家」「兄弟と虎」「兄弟と椎の実
取り」「猿女房」「猫の鼠退治」「猫のねた
み」「若殿と炭焼き娘」

名瀬市「三人兄弟の梅とり」「虎報恩」「娘と
残り茶」

喜界町「隠れ里訪問」「亀報恩」「枯骨の不
運」「三人兄弟の嫁求め」「爺の小箱」「継
子と白鳥」(注1)

(注) 本来、むかし語りの内容の紹介をしな
ければいけないと思うが紙数の都合で難しい
ので関心のある方は紹介書での確認をお願い
したい。

最初に「運定め話」が掲載されている。下
記のように本土でも奄美でも採録されてい
るが、少し詳しくみると①～⑦で分布にかなり
偏りが見られる。

- 「運定め話」57話 …… (本土 23：奄美 34)
- ①—水の神 …… (16：2)
 - ②—男女の運 …… (2：15)
 - ③—圧死の運 …… (0：9)
 - ④—寿命延ばし …… (1：5)
 - ⑤—のみの運 …… (3：1)
 - ⑥—夫婦の運 …… (2：1)
 - ⑦—水の運 …… (0：1)

話型によっても採録のされ方にかんがりの特
徴が指摘できる。

奄美で採録された34話の分布状況をみ
る。(括弧内は類話と参考話の採録話数)。

- ①—水の神(2) 参考話、大和村(2)
- ②—男女の運(15) 徳之島町(2) 伊仙町
(3) 喜界町(1) 知名町(2) 和泊町(2)
参考話、宇検村(2) 大和村(1) 与論町
(1) 和泊町(1)
- ③—圧死の運(9) 住用村(2) 宇検村(1)
喜界町(1) 瀬戸内町(4) 徳之島町(1)
- ④—寿命延ばし(5) 喜界町(1) 徳之島町

(1) 大和村(3)

⑤—のみの運(1) 喜界町(1)

⑥—夫婦の運(1) 徳之島町(1)

⑦—水の運(1) 天城町(1)

分布状況を見ると採録の必要性があきらか
である。筆者も若干の報告をしている(注
1)。

「のみの運」徳之島(1) 宇検村(1) 住用村
(1) 龍郷町(1)

の採録体験から大島本島、徳之島での分布が
明らかになった。他の島々での採録が課題。

注

1) 奄美諸島の運定め話—蛇と手斧型—『鹿
児島民俗』第57号 1982年

奄美諸島の運定め話『南島 その歴史と文
化』南島史学会 1982年

奄美民話集4『奄美民話ノート』に再録。

もう少し話型をみよう。

- 蛇婿入り9話型 …… (本土 22：奄美 15)
- 難題婿12話型 …… (13：16)
- 大歳の客5話型 …… (11：18)
- 天道さん強い綱3話型 …… (13：10)
- 姉は鬼4話型 …… (10：14)
- 姥捨て山9話型 …… (11：8)
- 天人女房6話型 …… (3：18)

話型によってそれ程本土と奄美の記録話数
に偏りがみられないのもあり民話伝承の面白
さを感じさせる。不思議である。

4 笑い話

笑い話は、309～538(形式譚13話型26話
を含む)迄あり、その中孤立伝承話は449～
525迄77話。77話中16話(21%)が奄美での
採録である。奄美での笑い話の伝承は、むか
し語り孤立伝承話で述べた豊かさに較べると
記録が少ないことがうかがえる。これが採録
者の姿勢により採録されなかつただけなのか
は課題である。孤立伝承話の話型を市町村に
見てみよう。

和泊町「鼻の穴は下向き」

徳之島町「三尺わらじ」「二度のおどし」「墓場の草」

宇検村「牛の金玉二つ」「下女と魚」「松山鏡」

大和村「女の知恵」「坊主売り」「嫁の出口」「六助と狐」

名瀬市「老人は茶の実」

奄美大島「おじさんに習え」

喜界島「頭の池」「欲ばり損」

住用村「のど焼き山」

孤立伝承話以外の分布状況を見る。

言葉のごまかし 28 話型… (本土 49 : 奄美 7)

和尚と小僧 17 話型 ……………(55 : 13)

物の名忘れ 3 話型 ……………(26 : 8)

勘違い 8 話型 ……………(11 : 1)

ほら話 3 話型 ……………(6 : 5)

難題婿 7 話型 ……………(27 : 14)

話型により本土と奄美での伝承に偏りがあるようだ。「日当山の話」は、鹿児島県を代表する笑い話であり、注目している話であるが、奄美ではどのような伝承にあるか少し詳しく見よう。奄美での変容などの関係でひなたやま等のかな文字を使う。「大島のひなたやま」という人もおられる(中条森雄氏 宇検村 1980年代に御教示)

奄美における「ひなた山」系話

はじめに

ここでは、鹿児島本土ではかなり知られている「日当山侏儒どん話」と関係のある「奄美諸島におけるひなた山系話」の状況について管見の範囲で述べるものである。本土系の話だろうと思うので奄美への伝播状況の把握をめざしている。なお、「日当山侏儒どん話」の規準は検討が必要であると思うが、稲田、小澤も伊地知信一郎著『日当山侏儒どん』(1973年)の報告を資料目録にしているので1980年時点の稲田、小澤編書をもとにしたい。奄美でどのような話が記録されているか紹介しよう。

奄美大島

瀬戸内町

1980年発行稲田、小澤編著には「ひなた山系話」は掲載されていないようである。

大和村

① 日当山(鶴の吸物)

言葉のごまかしー 309 鴨の大根。

(大和村津名久『福島ナヤマツ昔話集』

有馬英子編著 1973年)

殿様が知恵のある男と何人かの客を呼び、知恵のある男だけに鶴の吸物と称して大根汁を食べさせる。男は「鶴が毎晩来るので撃ちにこい」と殿様を案内し、大根畑に連れて行く。殿様が「大根ではないか」と言うと、「殿様の家で食べた鶴はあれだった」と言った。

② 日当山(月見)

言葉のごまかしー 310 紙袋の米

(大和村津名久『福島ナヤマツ昔話集』

有馬英子編著 1973年)

トクダウービ(徳田太兵衛)が「寝転んで月をみることができると言うので、殿が見に行く」と天井がない家である。殿が「家を建てる金をやるから紙袋を持ってくるように」と言うと、大きな紙袋を持ってきて金倉の上にかぶせる。殿は倉をやった。

③ 上真綿と上馬わた(梗概)

言葉のごまかしー 324 じょうまわた

文 英吉『奄美大島物語』1957 自刊

宇検村のある男に役所から「じょうまわたを上納せよ」命令がきたので、男は馬を殺して持って行った。「『上馬わたを納めよ』い言われますので、命から二番目の愛馬を殺し、わた(腹)を持ってきました」と言うと、「上馬わたではなく上真綿だ」と言う。男が「上真綿を上納しますので、馬を弁償してくれ」と言うと、「まちがいは両方の責任、半分けだ」と上真綿の上納は免除される。男は役に

たたないやせ馬のわたを持って行ったので、大もうけした。(場所不明、宇検村に入れた)

喜界島

① 片荷

言葉のごまかしー 309 鴨の大根

喜界町志戸桶 浜畑行英 (梗概) 岩倉市郎 『鹿児島県喜界島昔話集』新 日本昔話記録 12 三省堂 1974年

旦那が応兵衛をワヤク(からかう事)してやろうと「雁が沢山取れたんで今晚雁開きするから是非くるように」と使いを遣った。応兵衛は珍しい御馳走だと行った。一向にそれらしい気配がないが黙っていた。旦那は大根の煮たのをウンと出して、「雁開きじゃ」と言って食わした。応兵衛は「御馳走です」と知らんふりして食べた。

二、三日して応兵衛は、畑の竿に大根を沢山ぶらさげておき、旦那の所へ行き、「旦那様鉄砲を貸してください」と。旦那「どうしたのか」。応兵衛「畑に雁が沢山います」と言う。旦那が驚いて、自分が狩をしたいものだから鉄砲を担いで飛んで行ったら、大根だった。

ある雨の日に、応兵衛が旦那の所に来て、「旦那様旦那様、私の家は雨が降れば客が多くて座る所ありません」と言う。旦那は、「それは面白い俺も行ってみよう」。家の中は大変な雨漏りで座る所もない。旦那「これでは暮らしもならんから、葺き替えしらんばいかん」。「味噌がないから葺き替えできません」。「味噌甕を一本くれるから、明日取りに来い」。応兵衛は喜んで翌日馬をひいて行った。旦那は味噌甕を一本くれた。応兵衛は、馬の片方に付け、片方に庭石を付けようとした。旦那が、「それだけはやめてくれ」と言って、もう一本の味噌甕をくれたので、二本貰って帰って行った。

応兵衛がなかなか葺き替えをしない。旦那が「どうしてしないのか」と聞くと、「米が

なくて葺き替えができるもんですか」と。仕方なしに一俵くれる約束をした。また庭石を付けようとされ、二俵取られてしまった。応兵衛は旦那をだまして、立派な葺き替えをすることが出来たという事である。

② ひなた山

物の忘れー 354 団子婿

富実禎(『喜界島昔話集』岩倉市郎採録)

ひなた山という馬鹿な子供が、よそへ遊びに行つて、いっぱいおいしい餅を食べた。初めて食べたので、「何と言うのか」と聞いた。「これはムッチーという物だ」と教えられた。ひなた山は、母にもムッチーを造らせようと、名を忘れないように「ムッチームッチームッチー」と言いながら家へ帰った。とちゅうの溝を飛び越える時に「ヒットコサ」と掛け声をだしたら、「ヒットコサヒットコサヒットコサ」と言って家へ帰ってきた。母さん「ヒットコサと言うおいしい物を造ってくれ」と言ったが、母はわからなかった。

③ 賭け話し

(話者なし)(『喜界島昔話集』)

二人の話上手がかけ話をした。一人が「五万の屋敷に八万の家作れ」と言うと、もう一人が「ゴマをまいた畑の中に蜂に巣を作らせばよい」と答えた。次にもう一人が「高みから岩を落さば受け止めるか」と聞いたら、「クモの巣に引っ掛ければ受け止める」と答え、勝負なしになった。

徳之島

① 日当山

物の忘れーあいさつ失敗

太良才真 金見(梗概)『徳之島の昔話』

田畑英勝 1972年

妻はたましきき夫はふれいむんであった。親の家が新築された。妻は「いい気張りをなさいました。本当にきれいな家が出来ました

ね」と挨拶せよと教えた。外も教えたとおりにして誉められた。数日後、牛が駄目になった。妻が、「この度は大変な損をなさいましたね。死んだ牛は仕方がないから肉の部分だけは切って売るようになさい」と、口上を教えてそのとおりにして「これはいいたましききだと」と誉められた。ある日、運悪く妻の母親がなくなってしまった。妻は口上を教える暇もなかった。夫は前のように言えばほめられるだろうと、牛が死んだときのように挨拶した。このふれいむんはそこにいた人達みんなにさんざんたたかれ家から追い出されたそうなの。ちょう うがさ。

②日当山 廣田勝重 徳之島町花徳 (梗概) 田畑英勝『徳之島の昔話』1972年

日当山が生まれて十三になったので、六尺禪を作ってやった。禪をしめて山へ薪拾いに行った。歩きにくくなったので禪はとってかくし、行った。帰りに隠した禪が探しても見えない。ひょっと下の方を見ると墓に白い旗がバタバタしている。禪を盗んで下げていると走ってとろうとすると、葬式しているところだった。「葬式旗をぬすむか」と旗竿で尻をたたかれた。家に帰って叩かれた話をしたら、葬式をしているところでは「気の毒なことでしたね」とくやみを言わなければいけない。「人がたくさん集まっているところはくやみをいうのか」と言った。

ある日、遊び歩いていると、沢山の人が集まっていた。こういう所だと、表の方から入って「本当に気の毒なことでしたね」と。「嫁をもらってめでためでたと喜んでる所だ」と、げんこつをかまされた。家に走って帰り、あいさつすると、「げんこつをかまされた」と。「人が歌ったり、踊ったりしている所では一緒に歌ったり、踊ったりするものだ」と。教えられたとおりに思っただけで行きよったら人々がバタバタしている。「結構なことだ」と言って盛んに踊ったりしたら、火事の消火にバタ

バタしていたところで、耳たぶを打たれた。家に帰って、「親の言うとおりにしたら打たれた」と言ったら、「火が燃えている時には水をかけて消すものだ」と教えた。火が燃えている時は水をかけるといいと思って歩いていたら、鍛冶屋が道端で火を燃やしながら鋸作りをしていた。水をかけたら、鍛冶屋はカンカンに怒って頭を割ったというが。

③ 漁師の争い

言葉のごまかしー 329 はだかがえる

徳之島町金見元田永里『徳之島の昔話』

田畑英勝 1972年

老若の漁師がひとつのミノの所有で言い争いになった。勝負で決着をつけることになり、若者は刀を持って舟に乗り、老人は「はだかがえるという刀を持っているから」と、何も持たず舟に乗って出かけた。老人が「舟をつけるからお前はオモテ碇を瀬におろしてこい。自分はトモ碇をおろすから」と言って若者をおろし、その間に老人は碇綱を切り、若者をおいて帰ってきた。「はだかがえるという刀を持っている」と言ったのは、裸になって帰ってくるという意味だった。

沖永良部

言葉のごまかしー 鴨は大根

和泊町内城・男 岩倉市郎『沖永良部昔話』1940年。

殿様が追田卯平に「鷹をふるまう」と言って高菜を食べさせる。何日かして卯平が「原に鷹が四、五日前からおりにいるから撃ちにいきましょう」と誘うので、殿様が鉄砲を持っていくと、「以前にごちそうになった鷹がそこにおります。肥しをたくさん入れておきました」と言った。

ひなた山系話が見つけれなかった文献

沖永良部

『おきのえらぶ昔話』著者岩倉市郎 財団法人

人民俗学研究所編 古今書院 1955年
『沖永良部昔話集』関 敬吾編 鹿児島 全
國昔話資料集成 39 岩崎美術社 1984年
『知名町瀬利覚に伝わる昔ばなし』著者宗岡
里吉 南日本新聞開発センター編 1983年

与論

『与論島の民俗語彙と昔話』栄 喜久元著
奄美社 1971年
『与論島民話集』町田原長採話
与論島民俗文化資料館 1979年
『与論のしまがたり』菊 千代著
はる書房 1985年
稲田、小澤編著にある「ひなた山系話」を
1話は見つけた文献(本文後記)
『郷土研究』第2号 山一郎 1976年
「与論島民話話型一覧」『南島文化』創刊号
沖繩国際大学南島文化研究所 (1979年)

鹿児島県下における「ひなた山」系話の分類

309 言葉のごまかしー鴨は大根 22話中奄
美3話(喜界志戸桶、大和村津名久、沖永
良部和泊町内城、)
310 言葉のごまかしー紙袋の込め 6話中
奄美1話(大和村津名久、福島ナヤマツ)
311 言葉のごまかしーすりこぎで家建て
2話(国分市台明寺、同)中奄美0話
312 言葉のごまかしー鉄積みは三味線
2話(隼人町東郷、鹿児島市)中奄美0話
313 言葉のごまかしー石負い 1話(志布
志町)中奄美0話
314 言葉のごまかしー一寸坊と六部
1話(菱刈町)中奄美0話
315 言葉のごまかしーうしてこい 1話(大
口市春村)中奄美0話
316 言葉のごまかしー牛八匹 1話
(志布志町)中奄美0話
317 言葉のごまかしー黒い輪の絵 1話
(隼人町朝日)中奄美0話
318 言葉のごまかしーこの道は産 1話(鹿

児島市)中奄美0話
319 言葉のごまかしー五万の屋敷 1話中
奄美1話(喜界島)
320 言葉のごまかしー刺身にならぬ魚
1話(志布志町)中奄美0話
321 言葉のごまかしー三割負ける 1話
(隼人町朝日)中奄美0話
322 言葉のごまかしー四斗樽に五斗入る
1話(隼人町朝日)中奄美0話
323 言葉のごまかしーじゅうごんだ 1話
(川辺町田部田)中奄美0話
324 言葉のごまかしーじょうまわた 1話
中奄美1話(奄美大島)
325 言葉のごまかしー島くらべ 1話
(長島町城川内)中奄美0話
326 言葉のごまかしー尻をかぐ 1話
(薩摩地方)中奄美0話
327 言葉のごまかしー種はまぜらん 1話
(大口)中奄美0話
328 言葉のごまかしーはしごはだいだい
1話(隼人町東郷)中奄美0話
329 言葉のごまかしーはだかがえる 1話
中奄美1話(徳之島町金見)
330 言葉のごまかしー節穴をいきとおる
1話(鹿児島市)中奄美0話
331 言葉のごまかしーまたからするな
1話(隼人町東郷)中奄美0話
332 言葉のごまかしーめじろ 1話(鹿児島
市)中奄美0話
333 言葉のごまかしー役立つもの 1話
(鹿児島市鼓川町)中奄美0話
334 言葉のごまかしー山の男女 1話(鹿児
島市)中奄美0話
335 言葉のごまかしー闇夜の黒砂糖 1話
(隼人町朝日)中奄美0話
336 言葉のごまかしー指1本に隠れる田
1話(川辺町君野)中奄美0話
337~352 「和尚と小僧」話部分を省略してあ
る。
353 ふとんは櫓 21話中奄美1話(大和村

- 津名久)
- 354 物の名忘れー団子婿 18話中奄美4話
(奄美大島、宇検村生勝、喜界町浦原、大和村国直)
- 355 物の名忘れー買い物の名 4話(川辺、国分2話、薩摩)中奄美0話
- 356 「あいさつ失敗」12話中奄美4話(奄美大島、喜界、徳之島金見、名瀬市柳町)
- 357 「勘違いーかがり火」3話(国分2話、有明町蓬原)中奄美0話
- 358 「勘違いー大縄小縄」2話(長島町平尾茅屋、菱刈町南浦)中奄美0話
- 359 「勘違いーつーがんの皮」2話(鹿児島市)中奄美1話
- 360 「勘違いー上と下」1話(鹿児島市)中奄美0話
- 361 「勘違いーぜんとり」1話(川辺町野間)中奄美0話
- 362 「勘違いーたかを出せ」1話(大浦町久志地)中奄美0話
- 363 「勘違いー途中で待て」1話(鹿児島市)中奄美0話
- 364 「勘違いーめじい付け」1話(国分市清水)中奄美0話
- 365 「ほら話ーほら吹き息子」4話(長島町、中甕)中奄美2話(喜界町、龍郷町嘉渡)
- 366 「ほら話ーほらくらべ」4話(中甕)中奄美3話(徳之島町、喜界町、大和村)
- 367 「ほら話ーほら吹き」2話(国分市府中、里村)中奄美0話
- 368 「難題話ー難題問答」9話中奄美4話(喜界町、徳・金見、大和・津名久2話)
- 369 「難題話ー妻の援助」1話中奄美1話(喜界町、原題ブンブン太鼓)
- 370 「難題話ー灰縄」1話(国分市重久)中奄美0話
- 371 「すいかのはらわた」8話(菱刈、大口、国分2、鹿市2、薩摩、有明)中奄0話
- 372 「旅学問」8話(川辺、始良、国分、有明、志布志3話)中奄1話(喜界町)
- 373 「鼻きき男」8話(下甕手打2話)中奄美6話(瀬戸内町蘇刈、奄美大島、伊仙町上面縄、宇検村生勝、知名町具志検、徳之島町)
- 374 「グッチグッチ」7話(4話)中奄美3話(徳之島町山、喜界町浦原、宇検村生勝)
- 375 「狐にだまされる話ー馬の尻のぞき」5話中奄美1話(徳之島町花徳)
- 376 「狐にだまされる話ー馬の糞団子」1話(鹿児島市吉野)中奄美0話
- 377 「狐にだまされる話ー山伏狐」1話(有明町蓬原)中奄美0話
- 378 「しり」嫌い7話(国分、溝辺、菱刈、鹿児島市犬迫、野尻、川辺、薩摩)中奄美0話
- 379 茶の実 7話(川辺、菱刈、大口、十島、鹿児島市、国分、薩摩)中奄美0話
- 422 石を背中へ(原題・日当山侏儒ー石を動かす)3話(川辺町、隼人町、薩摩暢)中奄美0話
- 423 馬の尻に短冊(原題・穴かくしの話)

『日本昔話通観 鹿児島』に収録されなくて伝承分布していることが明らか話

瀬戸内町

①ヒニャタヤマと雀
勝俊一(嘉鉄)(梗概)

日当山は結婚したが夫婦の交わりがない。日当山が縁側にいると雀が二羽飛んできて交尾をした。「夫婦はあんなにしないとイケないのだ」と言って夫婦の交わりをしたそう。

②ヒニャタヤマと嫁
岡本善正(篠川)(梗概)

日当山は結婚しても夫婦の交わり方を知らない。親が心配して妻に「日当山はとんじゃくのいやつだから、気をきかせてくれ、縁側に知らないふりして腰巻の裾を開けて、眠ってみせなさい」と教えた。すると、日当山は帰ってくるなり妻を見て、「おっ母、妻が大変だ」「どうして」「あれは大斧の傷か、

小斧の傷か」「それはどうして」と言うと、「ああ、股が切り裂かれている」と。

「日当、日当、物食うことばかりしないで、働け」「はい、働きますよ」と言った。「偉い人ほど、大食いはしない」と言って、一膳、一碗の飯を食べて、働かされたそうなの。日当山というのは、足りない人のことかね。働かせると強かったそうである。

稲田、小澤では「段々の教訓—434 下の口を養え」に入るだろう。

①②南島昔話叢書1『瀬戸内町の昔話』登山修編著 同朋舎出版 1983年より

③日当山と団子

むかし、ヨウガマという男がしんせきの家でスィンダグ(注1)のごちそうになった。とてもおいしかったので、ヨウガマも妻に作ってもらおうと思った。道を歩きながら、忘れないように、「スィンダグ、スィンダグ、スィンダグ、・・・」と言いながら歩いていた。とちゅうまでくると飛び越えなければならない溝あった。調子をつけて、「ヒッタンコラサ」と、飛び越えた。あとは、家に着くまで、

「ヒッタンコラサ、ヒッタンコラサ、ヒッタンコラサ、・・・」に変わってしまった。家に帰りつくと妻に向かって、「ヒッタンコラサを作れ」と言っても通じない。何回言っても分からないので、しびれを切らして、「そんなにわからないのか。」

とキセルでゴツーン。妻は痛くてたまらず、「あれー、スィンダグができた。」ヨウガマは、「それ！それ！そのスィンダグを作れ。」と平気で言った。(岩井梅子さんよりの聞き書きを元に)

注

- 1) スィンダグは、ソテツの幹から取り出した澱粉を原料にして、砂糖などをまぜてむしてつくった団子。ソテツからとった粉をスィンということもある。
- 2) 拙編1970年『ふるさと』瀬戸内を知る

会(2号より『やどり』に書名変更 瀬戸内郷土研究会)の創刊号に掲載。一部書き直す。

稲田、小澤では「物の名忘れ—354 団子婿」である。

④ヒナタヤマと瓶尻

天井にカメを乗せてあった。それを降ろすことになった。主人は天井に上り、下にはヒナヤマにカメをつかんでもらおうと待たせた。主人は、カメを持って慎重におろして、ヒナタヤマに、「くちとう まり ひっかめいよ(カメの口と尻をつかまえろよ)」と言って、手をはなしたら、カメはガチャーン。

ヒナタヤマは、主人の言ったとおり、自分の口と尻をしっかりとつかまえていた。(注1)注

1)『やどり』第4号、瀬戸内郷土研究会 1971年 13頁。話者の記録なし。

稲田、小澤では「狐狸にだまされた話—381 瓶の尻」。

徳之島

③しなた山

前田長英 『徳之島の昔話』1994年 著作社(梗概)

母とグチとガタの三人家族がいた。浜下りの前日、母はガタにご飯炊きを頼んでグチと祭り小屋建てに行った。火加減についてもくわしく話しておいた。ガタは、母の教えどおり、はじめ少しずつ炊き、だんだん火勢を強くした。釜が「グチ・ガタ・グチ・ガタ」と言う。母は「グツグツと言う」と教えたが、「グチ・ガタ・グチ・ガタ」と音も大きく鳴りだした。「この釜はけしからん。兄さんと私の名を呼んで馬鹿にしている」と怒って、釜を持ち上げたときつけたら熱湯が足先にかかり赤くはれた。母とグチが帰ると、ガタは「釜にやられた」と足を見せて泣いた。

ある時、母親が病気になった。グチは看病

したが、ガタは庭先で遊んでいた。グチは母が心配で「ガタ、お医者様をおともしてきてくれ」。ガタ「お医者様はどこにいるんだね」。グチ「まっすぐ行った突き当りがお医者様の家だ。真っ黒い着物を着ている。いいか、失礼があってはいけないから、お医者様の前に出たらていねいにおいでくださるように言うのだよ」。ガタ「わかった」と出かけた。松の大木の枝にカラスがとまっていた。「これがお医者様にちがいない」と、独り言をいながら、深かぶかと頭を下げてお願いした。カラスは動きません。ガタは大声で「お医者様！」と叫んだ。びっくりしたカラスは「あほうあほう」と鳴いて飛び去った。

グチが代わって医者をともして来て見せた。熱は下がったが元気がでない。昔は薬用糖を瓶にいれ、天井の隅に隠してあった。グチは「ガタ、天井から味噌瓶をおろすから、お前は下で受けとってくれ」と言って、天井に上がった。グチは瓶を下ろそうと「ガタ、いま瓶をおろすから、お前はしっかりマイ（尻）を持て」と言うと、「よしわかった」とガタは威勢よく答えた。結果、ガタは自分の尻をしっかりとつかまえ、瓶は割ってしまった。

この話は、稲田、小澤の分類からすると複合しているようである。採集の体験からも複合を感じる。稲田、小澤では「難題話—グッチグッチ」・「狐狸にだまされた話—瓶の尻」話も入っている。

前田長英氏は、話のはじめに次のように述べている（梗概）。日当山と書いて島では「しな山」と発音する。（一）頑固者のわからず屋を評するという場合と、（二）うすのろでおめでたい人間をさして言う場合がある。上記は（二）の場合の話である。

南島昔話叢書3『徳之島の昔話』（1984年 福田 晃 岩瀬 博 松山光秀 徳富重成 編著者 同朋舎出版）「ぐつがたの話」が笑話に入っている。話者は長英氏の兄満広氏で

あることを指摘しておきたい。

④日当山

井之川 奄美民話集3『池水ツル姫昔話集』拙編（郷土文化研究会1988年）

昔は、天井に油カメなどあげておくものだった。カメをおろそうと橋をかけてあがった。「尻をつかめよ」「はい」「尻をつかんだか」「はい、つかまえたよ」。そしたら、自分の尻をつかまえていたって。カメは、落ちてうちわってしまった。

池水ツル姫の「ひなた山」の考え方は、「焼キシナタ」というように、悪い者、言うことをまともに聞かない者よ。足りない者ではなく、焼いた青木の丸棒（焼キシナタグイ）と似た人をいう。

稲田、小澤「狐狸にだまされた話—381瓶の尻」

与論

①ミニタヤマの話<一つ覚え>（原話『郷土研究』第2号 山一郎 1976年）「与論島民話話型一覧」『南島文化』創刊号沖縄国際大学南島文化研究所（1979年）より

昔、ミニタヤマという馬鹿な人がいた。ある日、高倉から瓶を降ろす手伝いだった。父親が、縄でしばった瓶を降ろしながら、「瓶の首と尻をつかまえたら合図しろ」と言った。ミニタヤマは自分の首と尻をつかまえて合図したので、瓶は地面に落ちて割れてしまった。

やがて、ミニタヤマは、一番賢い嫁をもらった。ある日、親の牛が死んだので、どうしたらよいか尋ねられると、ミニタヤマは「肉は売って金にかえ、骨は親戚中に配れ」と嫁に教えられたとおりに答えて感心された。それから、親戚の婆さんが死んで、どうしたらよいか尋ねられた。嫁に聞こうとするがいないので、前と同じように「肉は売って金にかえ、骨は親戚中に配れ」と言ったのでひどい目であった。

稲田、小澤「狐狸にだまされた話—381瓶の尻」と356「物の忘れ—356あいさつ失敗」が複合して「ひなた山系話」として伝承されている。

おわりにかえて

紙数の都合もあり、『奄美・笠利町昔話集』、南島昔話叢書『徳之島の昔話』『瀬戸内の昔話』など所収の話の紹介は、別の機会に譲りたい。

本土での日当山話の知恵有り殿的よりも愚か者話の方に傾斜している印象が強いが詳しい分析などは今後の課題である。「ヒニヤタヤマと雀」「ヒニヤタヤマと嫁」などはおおらかな性・性教育の話になっているが、本土ではあまり採録の体験も少ないし、話が2話記録されているだけだ（日本昔話通観25）。奄美での分布なども課題である。

5 動物昔話

『日本昔話通観』鹿児島篇をもとに奄美の民話収録の課題について若干延べたい。目次項目621の中、動物昔話は539～621迄83項目215話である。122(57%)話が本土93(43%)話が奄美の話である。そのうち46話型は「孤立伝承話」である。奄美の25話型を分布がわかるように市町村であげる。

与論町「いるかのいわれ」「火種の起こり」
和泊町「たことえびの丈くらべ」「豚の起こり」

天城町「くいなの起こり」「ハブの首」

伊仙町「息子とかまきり」

徳之島町「オーラノ鬼退治」「のみとしらみ」

瀬戸内町「ケンムンのいわれ」「みみずと土」

「家人とケッケマッケ」

宇検村「鳥の雲あて」「クッカルのいわれ」

「鼠と猪」「鳩巣作り」「蛇と蛙」

大和村「猿のやけど」「鳥の歌くらべ」「ふくろうの起こり」

笠利町「オットンピッキヤのいわれ」

喜界島「鳥とケラ」「太陽と月」「たばこの起こり」「ミヤ草のいわれ」

これを見る限りでは一話も孤立伝承話もない市町村がある。分布の視点からは伝承されていると思う。

「火種の起こり」は、①「ミロクとシャカが世の中を争う。勝負を枕元に置いた花が早く咲いた方で決める。シャカが咲いている花を取り替える。」

②「ミロクはすべての生き物の目を閉じさせ火種を隠す。バツタは目が横についており火の種を石と木に隠すのを見てシャカに教える」

住用村①の部分吉永イクマツ姫は「泥棒の始り」の話として伝承している。

龍郷町②の部分村田伸秀翁はアブが教えたとして伝承している。

他の動物昔話を概観すると本土と奄美に偏って採録されている話がある。

「猿と蟹の餅争い」……（本土32：奄美0）

「猿蟹合戦—仇討ち型—尻挟み型」（4：4）

「ほととぎす兄弟」……（23：0）

「かちかち山」……（9：0）

「ケシコー・クロシコー」……（9：0）

雀孝行……（5：12）

奄美だけで採録されている話と分布

「サクチの腹打ち」……（大・住・瀬）

「猿の起こり」……（大・笠・大）

「ネバリのいわれ」……（名・宇・喜）

「犬の足」……（宇・瀬・笠）

「蚕のおこり」……（宇・名）

「ガヤコムィ鳥は智恵者」……（大・和）

「ケンムンと川貝の競走」……（宇・徳）

「豚とかたつむりの競走」……（知・喜）

等々は採録数も多くて3話であり、奄美での分布の偏りもみえる。採録されていない島々での状況が課題である。

牛に関して

①異国船と牛

1848（弘化五年申）亀津村（現徳之島町）へ異国船一艘みえていた。

1849（嘉永二年辰）異国船四艘みえた。面縄湊（現伊仙町）へ乗入れ、上陸。

「牛を欲しいというふうに、両指をもって牛の角のようにしたので、牛はないと答えた」「牛はたくさんいるじゃないかと手様したので、右牛をくれたら、私どもの首が切られると手様」「野牛をくれと、・・・」「野牛を二疋つかめてやった、これはわが国にもたくさんいると手様で答え大した喜びもせず、野牛のおかえしとして、・・・」

1853（嘉永六年丑）四月十九日以来、「アメリカ船五艘、那覇川沖へ来着、一か月ばかり滞留、外に六艘の渡来を待って、都合十一隻で、和好交易を願うため江戸に行くとのこと、・・・（ペルリ艦隊のこと）」。

（『天城町誌』1978年より）

転記の文書があるのだろうか？

徳之島の牛に関しての民話など

② 牛盗（ヌスド）み按司と塩漬溜

伊仙町馬根の南東にある按司屋敷の表側に塩漬溜（シュチケイグムイ）がある。

③牛神信仰

天城町（天城・兼久・瀬滝・西阿木名）、伊仙町犬田布などで祀られている。

④シマクサラシ

悪疫が村落に入ってくるのを防ぐために行なわれた年中行事。旧暦の2・3月を中心に年2・3回行なわれた。村落で牛一頭を屠して骨片を左縄で括り村落の入り口に吊るした。肉は各戸に配分して食した。（動物儀礼・共食儀礼）

⑤赤牛洞

アーブシャエー・亀津南区

⑥牛の角

平成元年6月、亀津小敷地内出土。牛科の角芯。現生和牛と大差なし。

（徳富重成「燃ゆる闘牛の島・牛慰み祭りとフォーラム」資料より）

④のシマクサラシについては、研究されている。その由来話は「後生の牛一賭け型（原題・もの言う牛の話）」として沖縄県では『日本昔話通観 沖縄』26で記録されている。県下では奄美で「151もの言う牛」として5話記録されているが（名瀬・喜界・知名・大和・宇検）、牛の飼養が多く、闘牛も残る徳之島では記録されていないのが課題である。ケムンを動物に分類するのは課題があるかも知れないが、島人の認識には動物的なものである。

注

1)『日本昔話通観』25 鹿児島 稲田浩二・小澤俊夫責任編集 同朋舎 1980年

なお、拙編の奄美民話集1『住用村和瀬の民話』（1979年）、同2『吉永イクマツ姫昔話集』（1984年）を始め、その後の南島昔話叢書奄美諸島3冊（徳之島・瀬戸内町・大和村）、笠利町の昔話集等々の話型は発刊時代のずれかで利用されていない。また、通観25鹿児島発刊後、26年も経過しており、その後の状況について改訂の必要性を感じる。

6 奄美の伝説

はじめに

民話のなかで伝説と歴史とのかかわりあいが一番わかりやすいように思う。奄美に伝わる伝説についてすでに先学によって次のように分類されている（注1）。これをもとに奄美諸島の伝説と歴史について考えてみたい。地域別に編集された分類の仕方では、奄美（行政上では鹿児島県大島郡）は南島編に分けられている。奄美以外の離島や鹿児島本土は南九州（第十四巻）南九州編（熊本・宮崎・鹿児島）に含まれて1冊になっている。ここに、すでに奄美諸島の歴史的特異性が見られるように思う。南九州編では、分類の仕方も文化叙事伝説では、国土創造（阿蘇の大鯰）で1

話、他は神、仏、巨人、始祖、英雄、精霊(河童、狐、妖怪・猫)、長者、渡来人、名人、沈鐘。自然説明伝説では、木、石、岩、水、塚、山、祠堂等々である。南島扁とは表記の仕方が違い、話数は79話である。南島の190話を採用しているのと比べると奄美・沖縄の伝承の豊かさが理解できるように思う。南島扁はどのように分類され、話型が記されているかみてみよう。

注

- 1) 日本伝説大系(全15巻別巻1みずうみ書房)。第十五巻南島(奄美・沖縄)1989南島扁・・・伝説の分類と奄美の採用話型次のように伝説を分類している(一部工夫)。
文化叙事伝説(・・・以後は奄美の分だけを書抜き、採録地を記す。括弧内は通し順番)
- 1 宇宙の起源・・・(1)「月と太陽」(喜界町)、(2)「月食と鬼」(住用村山間)
- 2 国土の起源・・・(3)「流れる島」(名瀬市小湊2話・喜界町手久津久2話・瀬戸内町節子・笠利町屋仁・節田・用安・竜郷町戸口・竜郷・住用村市・宇検村久志)
- 3 神々の島建・・・(4)「昔世の始まり」(喜界町)、(5)「秋名のシマダテ」(竜郷町秋名2話・与論町)、(6)「世の始まり」(住用村山間)、(7)「島建加那志」(瀬戸内町節子4話・嘉徳2話・於斉)、(8)「世したてたん話」(伊仙)、(9)「世の始まり」(徳之島町花徳)、(10)「島建国建」(和泊町出花・沖永良部島)、(11)「島の始まりの話」(与論島麦屋西区・東区・茶花2話)
- 4 人類の起源・・・(12)「島建て加那志」(手久津久7話)、(13)「ヲナリとキヒリ」(瀬戸内町阿多地・蘇刈・清水・諸鈍・阿鉄・池地・名瀬市小湊・笠利町宇宿2話・用安)、(14)「小島の暗河(くらごう)」(徳之島町亀津・亀徳・伊仙町小島・検福・瀬戸内町蘇刈)
- 5 文化の起源・・・(15)「火種子くミルクと

サーカ>」(与論町立長・与論島・住用村山間)(16)「稲の始まり」(瀬戸内町於斉・古仁屋・蘇刈・諸鈍・於斉・嘉徳・節子・久慈・蘇刈・伊須・網野子・嘉鉄・篠川・花天・薩川・池地・請阿室・竜郷町竜郷)、「鶴の穂落とし田」(竜郷戸口・大勝・秋名・大和村今里)

- 6 神の争い(沖縄県だけ)
- 7 祭事の起源(沖縄県だけ)
- 8 神の子・神の嫁・・・(17)「太陽の下し子」(喜界町志戸桶・奄美大島・笠利町節田・用安・宇宿・名瀬市・大和村大柵・住用村役勝・瀬戸内町節子・嘉徳・網野子・徳之島町母間、参考バサンナガレ名瀬市)、(18)「雨気岳(あみき)ガナシの子」(徳之島町山4話・瀬戸内町勝浦)(19)「天女の子」(喜界町浦原・蒲生・天城町兼久・伊仙町伊仙・参考瀬戸内町薩川)
- 9 島の終末・・・(20)「美人の出ない村」。
- 10 英雄の事業・・・(21)「運天港と牧港の名の由来」の類話、(22)「行盛の最期」、(23)「百合若大臣」類話。(24)世の主がなし、(25)「茶上兼の最期」、(26)「真千鎌の横死」、(27)「与論のアアジンケエ」、(28)「坊主ガナシ」、(29)「美女は王様のぼり」、(30)「オアムシヤレ」、(31)「イナディオノン」。
- 11 人間と精霊・・・(32)「ケンムンの始まり」

自然説明伝説

- 1 動植物の由来・・・(33)「永久山の祭り」(上面縄、面縄)、(34)「島くさらし」(上面縄)
- 2 石・岩の由来・・・(35)「力石」(喜界伊砂・荒木)、(36)「志戸桶のビンドゥン様」(志戸桶2話)、(37)「キョラ石」(名瀬市芦花部・平)、(38)「腰掛石」(徳之島町)、(39)「舟ン帆岩(ふうでい)」(塩道)、(40)「イブィガナシ」(徳之島町亀徳・徳之島

町井之川)

- 3 橋・泉・水の由来・・・(41)「犬が見つけた井戸」類話(徳和瀬)、(42)「狩俣の池」(小野津)、(43)「徳和瀬のイビガナシ」(徳和瀬)、(44)「福川の主」(徳之島)、(45)「赤椀が浮かぶ泉川」(瀬利覚)、(46)「ありもんどもり」(山間)、(47)「石橋川の水争い」(沖之永良部島)、(48)「鹿浦川の松淵(まつぶき)」(伊仙町阿三2話・阿権・伊仙)
- 4 坂・山・洞・田の由来・・・(49)「手々のシバ祭り」(徳之島町)、(50)「マツバンの山」(亀津・伊仙町佐弁)、(51)「平家丘(ムイ)」(長嶺)、(52)「平家もり」(小野津)、(53)「ウニガマ」(塩道)、(54)「後生が道の洞穴」(蘇刈3話・久根津2話・網野子・阿木名・与路・西古見・阿鉄)、(55)「ウフランシューのムヤ」(早町)、(56)「ティルコムィ」(請阿室・油井・嘉鉄)、(57)「アーニマガヤ」(知名町)、(58)「アмамブックイの洞穴」(瀬利覚)、(59)「ピングヤマ」(与論町)、(60)「七城」(志戸桶)、(61)「ハナウミーダー」(花良治)
- 5 祠堂・墓の由来・・・(62)「無名寺」(与論町)、(63)「喜念権現」(喜念)、(64)「検福穴八幡」(検福2話)、(65)「シンコーボーの墓」(花良治・城久2話・中里2話)、(66)「ファミンカー」(小野津)、(67)「アーヤマト甕壺」(瀬利覚)

おわりにかえて

上記分類において、井之川のイビガナシは2石・岩の由来(40)「イブイガナシ」(徳之島町亀徳・徳之島町井之川)になっているが、信仰対象であって、「石・岩の由来」とは筆者には考えられない。イビガナシから200mほど離れた海岸にショウジ石と呼ばれる船をひっくり返したような岩などは「昔、船が遭難して石になった」と幼い頃に聞いており、形からも本当だと思っていた。

本などには取り上げられていないが、井之川岳山頂に犬呼び石(インユビ石)という岩

がある。昔、大猪に追われてこの岩に登った。諸田池の辺に犬を見つけ、呼んだらその犬が登ってきて助かったのが石の呼び名の由来だと言う。筆者など登頂の度に乘って諸田池を眺め、この民話を思い出し納得するものだった。まさに石の由来話である。

(42)「狩俣の池」(小野津)は、源為朝伝説で、沖の船から放った雁股の矢がささった所から泉が湧き出たという。大島本島の実久三次郎は為朝の落とし子という伝承があるが、為朝本人の伝承がないのが不思議である。徳之島の犬田布嶽の頂上には為朝の腰掛石という伝承がある。為朝伝説は12世紀の話であり、カムイヤキ古窯跡群の時代と同じ世紀であるのも何かを感じさせる。源氏は薩摩を統治した島津家との関係があると言われている。

平家伝説も大島本島を中心に伝承が豊である。『海原の平家伝説』(高橋一郎著 第一書房)として1冊にまとめられているほどである。徳之島の阿権には平(たいら姓)があり、一族は平家の落人だと井之川などでは伝承されている。

7 現代民話

『現代民話考』松谷みよ子(立風書房→ちくま文庫)シリーズ(1河童・天狗・神かくし~12写真の怪・文明開化等々)は、一部を『民話の手帖』に掲載されたときから学ばせていただいていた。なかなか採録ができずにいたけれども、その機会は意外に身近にあった。

本土の民話採録の機会が少ないと残念に思っていたが、鹿児島大学生(118人登録105人前後の出席者)に尋ねてみた。不思議な話として書いてもらったミニレポートは筆者にとってワクワクさせるほどであった。「怖い話」として体験したり、話し会ったりしていた。

「消えた乗客」(『消えたヒッチハイカー』

ジャン・アロルド・ブルンヴァン著大月隆寛他訳新宿書房)「トイレの花子さん」「コックリさん」「学校の七不思議」「口裂け女」「動く時計」「ピアスの白い糸」「金縛り」「幽霊話(関係本を5冊ほど紹介)」等々の話についてである(『鹿児島民俗』第130号へ一部掲載2006年10月刊。一部はテキスト『学生の奄美・自分史』2に掲載)。これらの話が民俗文化とは関係がないと思っていたとか、同じ年齢に近い人々が同じような体験や伝承をしていることに驚いたとかの感想などがあった。

これらが奄美ではどのような体験、伝承をしているだろうか泉和子著「学校の怖いハナシ——名瀬市立名瀬小学校」(注1)は奄美の小学校六年生で調査した報告としては最初であるように思う。筆者は小学校教員として県下8校(管理職4校)で務める体験をさせてもらったが、低学年への影響などを考えて調査する勇気がなかったことを告白しておく。その点では敬服している。著者自身の学校での怖い話を二宮金次郎に関して以外にも知りたいと思った。比較の視点から、あるいは、児童・生徒の心の動きの実態を把握するためにも奄美での多くの学校の実態があきらかにならばと願うものである。教育関係者の注目を期待したい。二宮金次郎の背負う薪の数、コックリさん、七不思議、トイレの花子さん等々鹿児島大学生の伝承と共通している点であり本土と共通点がある。

注

1)『奄美学 その地平と彼方』「奄美学」刊行委員会編、南方新社 2005年

Ⅳ おわりに

徳之島井之川を中心にシマジマ、島々とう民俗文化でのささやかな体験からして、身近な伝承が数多くあると思う。課題にしているアムトゥガナシ(ガナシ=尊称)をどうして祀るようになったのか。どうして現在の場所

に祀るようになったのか、正確な数等々機会あるごとに尋ねているが、人々によって受け止め方も違っている。「あの場所にもあった」とかの話もある。「あそこのアムトゥは怖い」という。「なぜ」の問いに「怖いアムトゥだ」としか伝承していない。

一人一人の民俗文化現象(物、場所、カミ等々)に対する物語は違うのだろうか。これらはシマの人々の心意形成、人格形成には筆者の体験からも大きな影響を与えていると考えられる(筆者は小松和彦氏の言う内在的歴史になるなあと思う)。

民話について笑い話を主にしての覚書を若干のべた。筆者は『住用村和瀬の民話』(郷土文化研究会、1979年)で1集落での奄美における民話の実態を報告した。27戸の小集落でも100種類ほどの民話の記録ができたからである。それ以後は、個人の民話集を4人ほど公にしても、奄美の各集落ごとの民話集が発刊されるまでは実態があきらかになったとは言えないと思っている。『徳之島の昔話』(田畑英勝、丸井工文社、1972年)記録の昔話がどのように変容しているのか、伝承されているのかも課題である。奄美での採録のために民話について若干の課題を提示したが、今後、広げ、深めていかなければならないと思っている。